

16歳 左目の失明など不幸が続く

22歳 寄稿を始める

40歳 来日しセツと出会う

54歳 死去

vol. 3

## 小泉 八雲

▶▶ Koizumi Yakumo

### さすらいの人生から一転、 日本に帰化し骨をうずめる

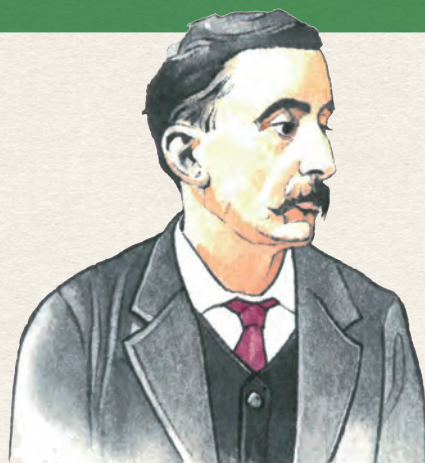
人生はよく「旅」に例えられるが、その行き着く先は案外、自分自身の中にあるのかもしれない。

#### ▶▶▶ 16歳で人生のどん底を体験

小泉八雲、出生名パトリック・ラフカディオ・ハーンは1850年、アイルランド人の父とギリシャ人の母の間に生まれた。大英帝国の時代、父はイギリス陸軍の軍医として、各地を転々としていた。母の故郷であるギリシャで穏やかに暮らしていたハーンは、2歳の時、父の故郷アイルランドに呼び寄せられる。だが、4歳の時に両親が離婚、父に引き取られ、大叔母に育てられた。

未亡人で夫の遺産があった大叔母の下、ハーンは金銭面では不自由な生活を送った。全寮制の学校に入り多くの友だちに囲まれていたハーンを、悲劇が襲う。16歳の時、学校で遊んでいたところ太いロープが左目を直撃し、片目を失明したのだ。悪いことは重なるのか、間もなくして父がマラリアで他界、経済的な支えだった大叔母も破産した。学校を退学せざるを得なかったハーンは、ロンドンの街をさまよった後、19歳でアメリカに渡る。

アメリカでは、印刷会社で住み込みの仕事をしながらい印刷と出版のスキルを身につけた。学生時代から作文が得意だったハーンには、「書く仕事に就く」という目標があった。22歳の時、校正の仕事のかたわら執筆した原稿を新聞社に持ち込んだところ採用され、その後記者となる。ハーンを書く記事は新聞に増刷がかかるほど読者の心をつかんだ。新聞社や出版社を渡り歩く中で、フランス文学の翻訳を手掛けたり小説を書いたりしながら、作家としての足場を築いていった。



ギリシャ生まれの作家。アメリカで活躍後、来日。「耳なし芳一」を取めた『怪談』を出版するなど日本文化を研究し海外に紹介。島根県尋常中学校の他、東京帝国大学や早稲田大学でも教鞭を執った。

#### ▶▶▶ 41歳で見つけた生涯の居場所

ロンドンからアメリカのシンシナティ、ニューオーリンズ、フランス領西インド諸島のマルティニーク島を経て、ハーンが日本にたどり着いたのは40歳の時である。出版社から旅行記の執筆を提案されたことがきっかけだった。200年以上に及ぶ鎖国を解き、目覚ましい成長を遂げていた日本には世界から注目が集まっていた。日本で旅行記を書き始めたハーンだったが、出版社とのトラブルで仕事を失う。困っていたところ英語教師の仕事を紹介され、島根県松江市に向かった。

英訳の『古事記』を読み出雲神話に興味をもっていたハーンは、和服を着て、神社仏閣を巡り、市井の声を聞き、現地の暮らしに溶け込んだ。一人暮らしのハーンの家に住み込み、身の回りの世話をしてくれたのは没落士族の娘、小泉セツ（23歳）だった。2人は片言でコミュニケーションを取るうちに、惹かれ合って結婚。3男1女に恵まれたハーンは、46歳の時、日本に帰化し小泉八雲となっている。

「蝶々夫人」然り、当時、西洋人にとって日本人女性は現地妻でしかないことも多かったが、ハーンはセツが扶養していた祖父ら4人も含め大家族を担う覚悟を決めたのだ。1つの土地に留まらない人生を歩んできたハーンにとって、それはどれほど重い決断だっただろう。50歳を前に手に入れた生涯の居場所は、幼い頃に母と生き別れ、家族の愛に飢えていたハーンにとって、何物にも代えがたい大切なものだったに違いない。

(執筆/ライター 篠田りょうこ)

参考:『ちくま評伝シリーズ 小泉八雲』(筑摩書房編集部著、筑摩書房刊、2015年)